Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

楊邦尼「毒薬」のHIV 感染者「当事者性」論争 : 台湾「同志文学」と「馬華文学」の交差点

劉, 靈均

(Citation)
海港都市研究,15:3-22

(Issue Date)
2020-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011998

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011998

楊邦尼「毒薬」のHIV感染者「当事者性」論争

――台湾「同志文学」と「馬華文学」の交差点――[1]

劉　靈均

(LIU, Ariel Ling-chun)

まえがき：「同志文学」における主体性の複雑さ

台湾では、1990年代以後、LGBTなど性的マイノリティをテーマとする「同志文学」が一大ブームである。しかし「同志文学」の本質とは何か、という質問に対して、未だに明確な答えは出されていない。それは、「同志」（つまり性的マイノリティの当事者）が書くものなのか、「同志」を書くものなのか。前者であれば、カミングアウトした作家の作品しか検討できなく、差別を受けている性的マイノリティの当事者の社会的状況への配慮を欠けており、後者であれば、書かれた「同志」たちはただの他者に過ぎず、主体性や能動性は失われてしまう。

このような問題に直面し、三木直大は、朱偉誠『台湾同志小説選』の序文と紀大偉『正面與背影：台湾同志文学簡史』を引用しながら「同志文学史の政治学」を論じ、「同志文学」というカテゴリーは書き手と読み手の共犯関係にあること、あるいは紀大偉の言うような「多様なる主体性」から生み出されるものであることを指摘した[2]。

しかし、90年代に勃興したのは「同志文学」だけではない。台湾の女性、独立運動者や母語運動者、中国から台湾に避難して「外省人」の第二世代、さらに原住民[3]、マレーシア華人系（以下「馬華」）などのマイノリティの当事者の文学も、戒厳令の解除や文学賞ブームの影響で数多く書かれるようになった。言論統制が緩くなった「中華民国」の国境内では、「中華民国」という「大きな物語」に対抗し、マイノリティの人々が個人の立場から「大

---

[1] 本論文の内容の一部は、すでに論者に速水信介というペンネームで「重服那方〈毒薬〉：七年之後再回首」（『季風帶』6号〔クアラルンプール、三三出版社、2017年12月〕）として発表されている。

[2] 三木直大「阮慶岳短編小説の構造と「台湾同志文学史」の政治学」『アジア社会文化研究』16号（東広島市、アジア社会文化研究会、2015）、67頁。

[3] 日本語では「先住民族」と称されたが、本論文では当事者が社会運動を起こし、台湾現地の法律（中華民国憲法増修条文）の修正まで勝ち取った「原住民」という用語を使う。

きな『台湾』物語」[4]に参与することになった。しかしこれらの人々が衝突しないわけがない。またこれらの文学作品は、「中華民国」、台湾文壇の内部だけではなく、他の文壇から影響を受ける可能性もある。「同志文学」に関して言えば、「同志」概念そのものの中国語圏における広がりによって、今後「台湾に限定した同志文学」を研究することの意味がますます問われていくことになる、と三須祐介は指摘している[5]。

一方、台湾以外のアジアや華人圏社会は、未だに性的マイノリティに対して厳しい環境にある。台湾の同志文学は他の中国語圏の地域に影響を与える可能性についても考慮しなければならない。

本章では、マレーシアの華人作家楊邦尼の作品における複雑な当事者性の問題を中心に、マイノリティ文学における当事者性の問題及びその読みの（不）可能性について考えていきたい。特にこの論争は、「同志」文学やHIV（ヒト免疫不全ウイルス）文学における人権問題や存在意義を問い掛けるだけでなく、マレーシア華人系文学（以下「馬華文学」）の作者の内的矛盾や、「華人」主体と「同性愛者」主体の葛藤の問題などにも関わっている。さらに、輻輳するマイノリティの主体性はいかに影響しあっているのか、また社会の主流にある文化や文壇にとってどのような存在であるのかについても考えていきたい。

一、「毒薬」論争、あるいは「神話はもはや」事件

1　楊邦尼について

ここでまず、楊邦尼を紹介しよう。楊邦尼、本名楊徳祥（ローマ字表記：Leung Teuk-seung）[6]は、1972年、マレーシア西部のジョホール州・クライ（マレー語表記：Kulai、現地中国語表記：古来、以下同）に生まれた。祖先は中国広東省大埔の客家人である。ジョホールバル（Johor Bahru、新山）の「独中」（中国語で教育を行う私立中学・高校）寛柔中学（Foon Yew High School）卒業後、1990年代に台湾に留学し、国立僑生大学先修班[7]を

---

[4] 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東京、東方書店、2012）、128頁を参照。

[5] 三須祐介「前衛としての台湾文学―1990年代文化論再考―国際シンポジウム参加記」『日本台湾学会ニュースレター』32号（2017.3.）、15頁。

[6] 「楊」は客家語や広東語のローマ字表記では本来「Yeung」とされる。だが楊によると、祖先が戸籍を登録するときに発音を間違えられたため、今なお一家のパスポート等公式文書では「Leung」と表記されているという。因みにFacebookなどのSNSでは、Benny Leungという名前を使用している。

[7] 「国立僑生大学先修班」は、1955年に「僑生」（中華系の外国籍学生や海外に住んでいた中華民国籍を持つ学生）のために設置され、修了以後は学生を各大学に分配する一年制の短期学校のことである。2006年、「国立僑生大学先修班」は国立台湾師範大学に吸収合併され、「国立台湾師範大学僑生先修部」となった。

経て、国立台湾大学中国文学系に入学、この時に文化評論誌『島嶼辺縁』に接し、さらに台湾の大学構内における最初のゲイ・サークル「男同性戀問題研究社 Gay Chat」に参加した。台湾の同性愛研究の最初の論集『同性戀邦聯』[8]の執筆者の一人でもある[9]。帰国後、南京大学中国文学系のシンガポール「海外班」で文学修士号を得た。「独中」で中国語を教えたこともあるが、現在は進学塾などで英語を教えている。国立台湾大学に留学していた時期に中国文学系の雑誌『新潮』に投稿したこともあったが、本格的にマレーシアの新聞や雑誌に投稿するようになったのは、30 歳以後、つまり 2000 年代以後のことである[10]。著書に散文集『古來河那邊』(2013)[11]、『浮沉簡史—城市，晃蕩，與友愛』(2015)[12]、詩集『刪情詩：在我手中微軟勃起』(2017)[13]などがある。

2009 年、楊はゲイの HIV 感染者の服薬体験に基づいて「毒薬」を創作し、マレーシア最大の華文文学賞である第十回「花蹤文学奬」に参加、決選まで残ったが最終的に落選した[14]。加筆と修正後、2010 年に「中國時報文学奬」の散文賞を受賞している。「毒薬」はのち『九十九年散文選』[15]（2011）と『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』(2013)[16]に収録されたが、前述した自身の散文集などには収録されていない。

2 「神話はもはや」事件

しかし、楊邦尼の名前が台湾の文壇で広く知られたのは、おそらく「毒薬」という作品の受賞自体ではなく、これにまつわる当事者論争、すなわち「神話はもはや（神話不再）事件」である。

それは 2012 年 10 月 7 日、「毒薬」受賞の二年後のことであった。当時の審査委員で、同じくマレーシア出身の作家鍾怡雯（Chong Yee-Voon、1969-、マレーシア西部のペラ州イポ市出身、現台湾・元智大学中国語文学系主任）は、聯合報の副刊に「神話不再」という散文を発表して、台湾の文学賞の「怪現象」を指摘し、以下のように記した。

---

[8] 國立台灣大學男同性戀研究社編『同性戀邦聯』(台北、號角、1994)。
[9] 楊邦尼「想我大學的同志社團 Gay Chat」『號外』437 号（2013.12.）
[10] 楊邦尼に関する詳しい事実は、著書の著者紹介と、2017 年 3 月に本人に対してのインタビューから編集したものである。また彼のブログ「寫在邊緣」も参照している。
[11] 楊邦尼『古來河那邊』(セランゴール州、大将出版社、2013)
[12] 楊邦尼『浮沉簡史—城市，晃蕩，與友愛』(セランゴール州、大将出版社、2015)
[13] 楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』(クアラルンプール、三三出版社、2017)
[14] この時の最終審査の記録は、『花蹤文匯』第 10 号（セランゴール州、星洲日報、2010.8.）で読める。
[15] 宇文正主編『九十九年散文選』(台北、九歌出版社、2011)。
[16] 林春美、陳湘琳編『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』(セランゴール州、有人出版社、2013)

> 2 年前の出来事だが、やはり吐き出さないことにはおさまらない。某新聞の文学賞の散文賞の最終候補に残ったうちの二篇は、特異な自伝体散文で「虚構」の疑いがあった。四人の審査委員の意見が異なったので、主催側は単刀直入に電話で作者に「事実」かどうか尋ねることにした。原住民族の題材で作品を書いた作者は虚構であることを誠実に認め、当然ながらそれが原因で落選した。もう一人の自分のエイズの「完治史」を書いた作者は、自身の経験であると大言を吐いて恥じなかった。そのため、彼が受賞したのである。それはマレーシアの同郷者だった。この作品はいくつかの文学賞を彷徨してきたため、まさにこの瞬間を待っていた。賞金は二十万元であった。その年は新聞社の六十周年記念で、賞金はとりわけ高かったのだ。[17]

鍾怡雯は、「嘘をついて大賞を取った」この「マレーシアの同郷者」を批判し、「マレーシアの文壇はそう大きくなく、面子は決まりきっているが、誰かがエイズに感染したことなんて聞いたことはない。」[18]と主張した。また、作品自体については、他人事を語るように感情を欠いているうえに、「ただの堅苦しいエイズの資料の羅列」であるという技巧面の問題があるとしている。さらには、エイズが全快することはあり得ず、エイズの病状を周囲に隠し続けることも不可能であること[19]、エイズのカクテル療法[20]の発明者で台湾系アメリカ人の何大一（デイビッド・ホー、David Ho, 1952-）の名前を書き間違えていることなども指摘されている。こうしたことから、鍾はこの散文が「虚構」であると判断し、この「マレーシアの同郷者」は「エイズを利用し、同志を利用し、そして読者や審査委員の同情心も利用した」[21]と批判した。さらに鍾は、このように同情心を利用して賞金を狙う作品が急増したことに憤慨し、「やはり私たちの年代の、まだ光輝くような文学賞がなつかしい。でもおそらくその神話はもはや存在しないのだ。」[22]と締めくくった。

鍾の告発から一週間後の 2012 年 10 月 14 日、楊邦尼による「鍾怡雯の『神話はもはや』

---

[17] 以下の引用は全て鍾怡雯「神話不再」『聯合報』2012.10.7.、D3 版から。原文：「兩年前的事，不吐不快。某報的散文決審，其中兩篇題材特殊的自傳體散文有『虛構』之疑。四位評審各執一辭，於是主辦單位決定單刀直入，當下去電詢問兩位作者所寫是否『屬實』。寫原住民題材的作者老實承認，純屬虛構。他理所當然落選了。另一位寫自身愛滋病『痊癒史』的作者大言不慚，此乃自身經歷。於是他得獎了。得獎的是馬來西亞同鄉。這篇散文流浪過幾個文學獎，等待的不外乎這一刻，二十萬。那年是報社慶祝六十年，獎金特別高。」

[18] 原文：「馬來西亞的寫作圈子那麼小，來來去去就那些人，我可沒聽說誰得了愛滋。」

[19] 「今は外見からは分からないくらいまで治ったなんて、可能だろうか？エイズなのに。」原文：「治癒得外表完全看不出，可能嗎？愛滋病耶。」

[20] 複数の薬物を使用する「HAART 療法」を指している。「カクテル療法」（原文：雞尾酒療法）は俗称。

[21] 原文：「這位作者消費了愛滋病，也消費同志，同時也利用了讀者或評審的同情心。」

[22] 原文：「我還是比較懷念我們那時代，還戴著光環的文學獎。只怕神話不再。」

（鍾怡雯的〈神話不再〉）」という文章が、同じく聯合報の副刊に掲載された。その中で、楊邦尼は自分がその「マレーシアの同郷者」であると自ら告白し、反論を加えている。楊は、個人が HIV の感染者であるかどうかは公に討論されるべきことではないことや、「毒薬」は「花蹤文学奬」の次に「時報文学奬」に応募したにすぎないのであるから「いくつかの文学賞を彷徨した」というのは事実ではないことを記している。さらに、鍾怡雯の彼に対する誹謗中傷に抗議し、HIV やエイズについての鍾の知識が正確でないことも指摘した。また、2010 年の審査会議の時に、彼は当初自分が感染者であるかどうかについて明言しなかったが、その後文学賞のスタッフに電話で尋ねられたので承認せざるをえなかったことについても述べている[23]。

さらにその三日後の 2012 年 10 月 17 日、聯合報の副刊は鍾怡雯の「誠信」という短い返信を掲載した。鍾怡雯は、「楊と親交の深いマレーシア詩人やメディアの主任や同志作家」の三人に聞いたとして、楊邦尼の電話での告白に対し、「真実はただ一つであり、弁解の余地はない」と憤慨を表明した[24]。

鍾のこのような発言は結局、台湾の「同志運動」界と若手文壇の反感を買うことになった。例えば、ゲイであると公表している詩人羅毓嘉（1985-）は、鍾の「誠信」が掲載された同日にブログで鍾を批判した。羅は文学賞が「真実であるかどうか」を基準として受賞の可否を決めることこそ鍾怡雯自身が批判した「怪現象」であり、HIV／エイズの患者は現実の社会でカミングアウトすることができないため、文学の虚構性は唯一の救いであると述べている[25]。文芸評論ブロガー唐小宇（1986-）はさらに、一番自由なメディアであるべき文学作品が他人のプライバシーの告白を強要するものに成り下がったとして、文学賞の主催側と審査委員の鍾怡雯を批判した[26]。また、HIV／エイズに関する知識の錯誤（発病しなければ患者と一般人の外見が変わらないことや、HIV の治療は完治ではなくウイルス量を低くコントロールすること）なども批判の焦点になっていた[27]。

---

[23] 楊邦尼「鍾怡雯的〈神話不再〉」『聯合報』2012.10.14.、D3 版。

[24] 鍾怡雯「誠信」『聯合報』2012.10.17.、D3 版。

[25] 最初は 2012 年 10 月 17 日に、ブログで「必須多談，因為事涉愛滋」というタイトルで掲載されたが、のちタイトルを変えて雑誌に登載された（「文學不該「社會盲」 談散文創作的紀實與虛構」『人籟論辨月刊』98 期（台北、中華利氏學社）、2012.11.、4-5 頁）。散文集『棄子圍城』にも収録されている（羅毓嘉「允許魍魎現身」『棄子圍城』（台北、宝瓶文化、2013）、290-294 頁）。

[26] 唐小宇「面對這樣的問題，當事人該如何回答？」http://kaorikuraki.blogspot.jp/2012/10/blog-post_25.html（2012.10.25、最終閲覧：2019.12.4.）

[27] 例えば翟翱（1987-）は、鍾怡雯が指摘している文学賞の怪現象の存在を認めているものの、HIV 感染者とエイズの患者(発症者)を混同しているなど、彼女が言い張っている散文の真実は「エイズに対するデタラメな認識」に基づくものではないかと批判している。翟翱は若手作家で、2019 年現在は出版社の編集者を務めている。翟翱「愛滋的可能」『聯合報』、2012.10.12.、D3 版を参照。

2012 年の論争で鍾怡雯が批判したのは、一見散文というジャンルにおける当事者性の問題に見えるが、その言論からは同性愛者、HIV 感染者、エイズ患者の人権問題と、馬華文学、同志文学、原住民文学などのマイノリティに関する文学ジャンルの当事者性とその存在の意義、そして「文学賞」のメカニズムに関わる問題が浮かび上がっている。

二、「同志文学」としての「毒薬」

ここでは『中国時報』に掲載された楊邦尼「毒薬」を簡単に紹介したい。「毒薬」は三千字余りの散文である。冒頭で魯迅「薬」(1919) の一節を引用し、その後「一、毒」「二、薬」「三、毒薬」と三節に分かれている。ただ意識の流れに従って書かれているため時系列順には並んでいない。大まかに言えば、「一、毒」と「三、毒薬」には主に「現在」について、「二、薬」には回想が書かれている。「一、毒」は「私（原文：我)」が HIV 感染者ということを告白するもので、他人との性的交渉で感染したと見られるが、薬物治療はすでに始まっており、ウイルス量は測定できないほど下降している。体調は投薬のおかげで安定しているが、めまい、体の発熱等の副作用に悩まされている。「二、薬」では「私」が初めて服薬したときの副作用の苦しさを回想する。同居する両親には病状を知らせたくなかったために、その苦痛は生理的なもののみならず精神的負担となってのしかかった。「私」は親友Hに、副作用の苦しみから自殺を考えていることを吐露し、発病直後にHと一緒に病院に行った体験を思い出す。「三、毒薬」では、時間軸が現在に戻されている。「私」はようやく勇気を持って、治療薬の副作用と治療する薬物の薬名を羅列し、治療方法の進歩について述べ、さらに一旦薬を飲み始めたら、死ぬまで毎日定刻に飲まなければならないことも述べる。「私」はスポーツを始め、腹筋が「見え隠れする」（若隠若現）までトレーニングして、体の中のウイルスと「子と手を執りて、子と偕に老いん」（執子之手、與子偕老[28]）と「決意」する。

「一、毒」の二段落目にはこのような文がある。

> 私が何回病院に出入りしたのかはもうとうに忘れた。ひっそりと、こっそりと、ばれたら死ぬから、知り合いに会ってしまうのが怖い。あら、あなたも病院に来たの、病気なの、薬をもらうの、何の病気なの、と。否、私は荒人と巫女の真似をしていて、道連れ

[28] 『詩経・邶風・擊鼓』より引用。

のいない旅人で、一人なのだ。誰かに会ってしまったとしても、透明人間であるはずだ。（下線は論者による）

ここの「荒人」とは、女性作家朱天文（1956-）の長編小説『荒人手記』（1994）[29]を意識して書いたものだと考えられる。『荒人手記』の主人公は、一人称のゲイで、自分がかつて愛した台日ダブルの男性を偲んでいるが、その男性はすでにエイズで亡くなっている。作中の「荒人」とはゲイを指している。また、「巫女（原文：女巫）」、「道連れのいない旅人（原文：不結伴的旅行者）」という言葉も、同じく朱天文の長編小説『巫言』（2008）よりの引用であり、「巫人」は「小説家」を、「道連れのいない旅人」は作中に登場する末期ガンの患者を指している。

「毒薬」は文章の風格においても朱天文の『荒人手記』の影響が強く見られ、『荒人手記』を念頭に置いて創作したものといってもよいほどである。例えば「三、毒薬」で、薬の副作用と薬の名称を羅列する一節は、以下のようになっている。ここで少々長いが引用しておきたい。

> 経口薬を飲み始めた数年後、私はようやく怯えながら薬についている英語の説明書を読むことができるようになった。開けられたパンドラのブラックボックスには、ギッシリとした英語の魔法が並ぶ。作戦の図譜を発掘するように一字一句で薬の効果を読む。震えながら読んでいてわかったのは、これは私が一つ一つ経験してきた神経系の症状なのだ。最もよくあるのは不眠症、無気力、注意欠陥、連続して襲ってきた悪夢。副作用は次から次へと続き、知らない英単語がたくさん出てきて、一々辞書を引くと、発疹、目眩、吐き気、頭痛、倦怠感、アレルギー、認知失調、混淆、マヒ、眩暈、肝炎、不安、欲求不満、妄想、興奮、妄語、狂気、感情波動、酩酊、幻視、精神異常、精神衰弱、執着、痙攣、痒み、腹痛、かすみ目、光アレルギー反応、皮膚炎、膵炎、自殺傾向。私は読みに耐えられずに、立ち上がって、陽気をひと口でも吸おうと。
> 私はウイルスの生態を想像する。開発されていく薬はウイルスのいかにもずるい変化を追いかけて行く。言葉を変えると、ウイルスは薬を抗っているのだ。ほらその薬名も、くるくる回って、まるで早口ことばのようだ。維樂命（ビラセプト）、施多寧（ストクリット）、雙汰滋（コンビビル）、賽瑞特（ゼリット）、佳息患（クリキシバン）、立妥威（レトロビール）、硬いカプセルの沙奎那維（サキナビル）。

[29] 朱天文『荒人手記』（台北市、時報、1994）。以下の引用は 1997 年の 2 版だが、文字の内容はほぼ変わらないと言われている。

このような羅列は、『荒人手記』の「紅緑色譜表」などの大量な名詞の羅列を想起させる。その一節を引用する。

> 恐竜になったおれの目に唯一入ってくるのは、色彩研究の論文で、中国の詩歌における赤と緑二色の視覚イメージに関するものだけだ。
> おれはいつもそれを持ち歩いてお経のようにくりかえして暗誦した。実はこの論文はほとんど網羅的な色彩元素周期表に近い。それには赤と緑に関するいくつかの色彩系統の、さまざまな名称が羅列されている。日本人が書いた中国色彩総覧だけ見ても、マンセル表色系に従って明るい順に並べられ、明度が同じものは彩度の高いもの順になっていて、赤は一四〇種類もある。ちょっと見てみると、色彩譜の七・五Ｒの赤には、潤紅（ルンホン）、淡蔵花紅（タンツァンホアホン）、指甲紅（チ チアオホン）、穀鞘紅（ク チアオホン）、淡桃紅（タンタオホン）、淡罌粟紅（タンイン ス ホン）、蘋果紅（ピンクオホン）、頰紅（チアホン）、瓜瓤紅（クアランホン）、鉄水紅（ティエシュイホン）、草苺紅（ツァオメイホン）、曲紅（チユホン）、法螺紅（ファルオホン）、桂紅（クイホン）、榴花紅（リウホアホン）、汞紅（コンホン）、烹蝦紅（ポンシアホン）、胭脂紅（イェン チ ホン）、蟹螫紅（シエアオホン）。
> 緑色の色彩譜の一〇ＧＹの緑には、艾背緑（アイペイリュ）、嘉陵水緑（チアリンシュイリュ）、嫩荷緑（ネン ホ リュ）、紡織娘緑（ファンチニャンリュ）、水緑（シュイリュ）、綉球緑（シウチウリウ）、螳螂緑（タンランリュ）、豌豆緑（ワントウリュ）、玉髄緑（ユ スイリュ）、青菜緑（チンツァイリュ）、巴黎緑（パ リ リウ）、青梅緑（チンメイリウ）、蛍石緑（イン シ リュ）、秧緑（ヤンリュ）、萵苣緑（ウオチユリュ）、豆緑（トウリュ）、琉璃緑（リウ リ リュ）、藻緑（ツァオリュ）、柞蠶緑（ツオツァンリュ）、麦浪緑（マイランリュ）、蛇膽緑（ショタンリウ）、青豆緑（チントウリュ）、淡灰緑（タンホイリュ）、深琉璃緑（シエンリウ リ リュ）、浮萍緑（フ ピン リュ）、草緑（ツァオリュ）、紫杉緑（ツ シャンリュ）。
> 文字のロジックを避け記号性さえ捨てさると、文字は万華鏡のなかの砕片となって、華やかな景観をなす。おれはそのなかに入って我をわすれ、純粋な色彩感覚の花園でハエが複眼でものを見るように飛びまわった。[30]

このような文字の羅列は、物語を推進するというよりも、むしろ「文字の論理から逃げ」るものであり、これは施淑の言葉を借りれば「感官の知覚で生活のなかの事件を生命力にあふれているかけらに分解し、また再編成して、織り込んで、一般の経験や観念以外の人のライフ・スタイルに継ぎ接ぎする」[31]ものであろう。このような「経文」のような宗教めいた部分を「魔法」として模倣しても、「一般」の人は解説なくては簡単に理解できないが、これは同性愛者やHIV感染者の経験が「一般」人の経験から離れている、ということのメ

---

[30] 朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997［1994］）、89頁。日本語訳は、池上貞子訳『荒人手記』（東京、国書刊行会、2006）、105-106頁による。なお一部明らかに誤植したフリガナは論者により修正した。

[31] 「有關《荒人手記》的部分」（第一回「時報文学百万文学奬」の審査会議の記録の抜粋）、朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997［1994］）所収、222頁。

タファーとして考えてもよかろう。

『荒人手記』は台湾の「同志文学」のカノンとも言える作品で、作者の朱天文はゲイではないものの愛読されてきた。台湾の国内外を問わず、その文章風格を模倣する者は多い。楊の散文は所々で『荒人手記』を想起させ、文章風格も似ていて、台湾「同志文学」の影響がうかがえる。

面白いのは、『荒人手記』の主人公は同性愛者であるものの、実は中国から日本に流亡していた哲学者胡蘭成（1906-1981）を記念する作品でもあることだ。戦前に南京の汪精衛政権に勤めていたことで「漢奸」とされた胡蘭成は、日本の神道と中国の天人概念との間には共通点があると主張したが、共産中国や国民党の台湾では失われた「中国文化」を、流亡先の日本で探し当てたと言えるであろう。『荒人手記』もまた日本が舞台であり、日本が「荒人」の悟りの場所となっている。一方、中華系のアイデンティティを持つマレーシア華人の「私」も、おそらくマレーシアにおける先行文学作品からは、自分のゲイとして、HIV 感染者としての苦痛を語る手法を見つけられず、台湾同志文学作品のカノンから、同性愛者を表現する方法を学び、それで表現したのではないか。異国において自分が追い求めた世界を発見すると言う点において二作は類似している。

三、馬華文学として読む「毒薬」

「毒薬」はその内容から、主人公がゲイであることが看取できるが、マレーシアに関する描写はほとんどない。前述の通り、朱天文『荒人手記』の作風を模倣した文字は、台湾的文章であり、マレーシアで書かれたものとは思われない可能性が高い。特に文学賞に参加した作品として読めば、おそらく作者ゲイで HIV 感染者であるという背景しか読み取れないであろう。

この文章がマレーシアで書かれたものが分かる部分は二つしかない。一つは、HIV の治療に関する箇所である。HIV の治療や予防に力を入れ、度々政策などに進言している台湾の内科医羅一鈞氏[32]は自分のブログで「毒薬」をシェアし、感染症専門内科医として注をほどこし、「毒薬」の HIV 治療薬の中国語名は、いずれも台湾の薬名とは異なっていることを指摘している。また「長い長い処方箋が出され、（論者注：病院内の薬局で）整理券を取り、薬をもらう順番を待ち、そのあと指定された（論者注：外部の）薬局で管制されている恥

[32] 1977-、当時は国立台湾大学附設医院の内科医、2019 年現在は台湾行政院疾病管制署副署長。

ずかしい薬を買いに行く。」[33]という場面については、病院内の指定薬局で直接薬をもらうことになっている台湾の事情とは異なっているという[34]。このようなマニアックな知識は、おそらく文学賞の審査委員は持っていないだろう。

もう一つは、副作用に苦しんでいる場面についてである。「私」は寒気がして、「ここは常夏の半島なのに、自家のベッドの中で凍死するなんて、なんてデタラメなんだ」[35]と心境を綴っている。「常夏の半島」という言葉は、台湾の人なら屏東県の恒春半島を想起するであろうが、マレーシア華人にとってはマレーシア西部を指す言葉として使われる[36]。思うに「毒薬」は最初、台湾の中国時報文学奬ではなく、マレーシアの「花蹤文学奬」に投稿されたので、現地マレーシアをイメージして用いられたのであろう。

創作年代と背景から考えると、2009 年の台湾ではすでに性的マイノリティに対して比較的寛容になっていた。2003 年から始まった「台湾同志遊行（台湾プライドパレード）」は、毎年数万人が参加するようになり、2004 年から教育現場で適用されていた「両性平等教育法」も、性的指向などにも配慮した「性別平等教育法」に変更され、当事者によるパートナーシップや同性婚の法制化の推進なども始まっていた[37]。

一方、マレーシアは性的マイノリティに対して保守的な姿勢を崩していない。同性婚やパートナーシップはおろか、旧植民地時代から残されてきたマレーシア現行刑法 377 条（いわゆる「ソドミー法」）は「自然の秩序に反する」性行為として「男性器を他人の肛門または口腔の中への挿入」などの行為を違法としているので、男性同性愛者の性行為は合意があっても重い処罰の対象となっている。またイスラーム法であるシャリーアにおいても違法とされている[38]ので、ゲイであることをカミングアウトすることは危険を伴う行為である。アンワル・ビン・イブラハム（Anwar bin Ibrahim、1947-）元副首相がある男性との

---

[33] 原文：「開處藥方一長串，拿號碼等領藥，再到指定西藥店買管制不得見光的藥。」

[34] 羅一鈞のブログ「心之谷」「《時報文學奬散文首奬》毒藥【楊邦尼】」http://heartvalley.blogspot.jp/2010/10/blog-post_15.html （2010.10.15.、最終閲覧：2019.12.4.）。ここでは、「悲哀や死亡を語らない」というところが評価されている。

[35] 原文：「這裏是長年炎夏半島，我怎可凍死在自家床上太荒唐」

[36] 例えば同じくマレーシア半島部出身の鍾怡雯も、自分の「自伝体散文集」を、『野半島』（台北、聯合文学、2007）と命名した。

[37] 台湾の性的マイノリティ運動の動向は、劉靈均「性的マイノリティ運動　戒厳令解除以後の道のり」『台湾を知るための６０章』（東京、明石書店、2016）を参照。なお、戒厳令解除以後の性的マイノリティに関連する法律の動向については、鈴木賢「台湾における性的マイノリティ「制度化」の進展と展望」『比較法研究』78 号（比較法学会、2017.1.31.）、236-246 頁に詳しい。

[38] マレーシアの性的マイノリティの当事者に関わる法的問題は、クウオン・キ・ジュン「マレーシアー同性婚に関する法的および政治的制約」『福岡大學法學論叢』61 巻 3 号（福岡市、福岡大学研究推進部、2016.12.）、835-856 頁に詳しい。

アナルセックスを告発され、再逮捕されたのは 2008 年のことである（2018 年に「全面的赦免」を受けた)。差別的な法律の下では社会の空気はさらに厳しいものだと考えられる。また湯炳超によると、マレーシアでは同性愛者は 21 世紀に入ってからようやくメディアに現れるようになったが、やはり迫害の対象であり[39]、華人系の性的マイノリティの当事者は、華人として、性的マイノリティの当事者として、二重の圧迫を受けている[40]。

また、これまでの馬華文学にも「同志文学」と考えられる作品はあったが、許通元によると、質的に、また量的に向上し、題材も多様的になってくるのは 21 世紀に入ってからだという[41]。『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』を編纂した林春美[42]も、マレーシア華人の散文に同志／エイズなどのセンシティブな題材は極めて稀で、むしろ小説にそうしたものがみられるとして、「毒薬」の特異性を指摘する[43]。つまりマレーシアは、同性愛者としての経験を自由に発言できるような環境ではなかったし、HIV 感染者としての経験もまた公にしにくいと考えられる。馬華文学研究の華人大学院生が「同志文学」研究を進めようとして、大学教員に阻止されたことも報告されている[44]。

「毒薬」は「マレーシア文学」としての特徴は稀薄であり、あえて台湾の同志文学の影響をアピールしたものだ。他の楊邦尼作品を見ると、「邊城三疊」[45]では、ジョホールバルを描いてはいるものの、構造や描写には朱天心「古都」(1996) に影響を受けたレズビアン的な感情が描かれる。また愛する台湾人の男性への思いを込めた詩集『刪情詩：在我手中微軟勃起』の書末に付された「鳴謝」の引用作家の表には、「馬華」詩人木焱[46]と映画監督蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）[47]を除けば、台湾、中国文学や西洋文学の作家ばかりが並んでいる。同性との恋は全て台湾で発生し、また台湾のテキストを借りて書かれているため、

---

[39] 湯炳超『論馬來西亞華人男同志的處境』(桃園市中壢区、元智大学中国語文学系修士論文、2015) を参照。23 頁の「馬來西亞性別人權事件表（マレーシアにおけるジェンダー人権事件リスト)」では 1980 年代以来の性的マイノリティに関わる事件が整理されている。ちなみにこの表にはこの「神話はもはや」事件が見られないことと、鍾怡雯は湯炳超の指導教官の一人であることを付記しておきたい。

[40] 湯炳超、前掲書。またマレーシア華人ゲイの当事者としての葛藤は、キリスト教牧師でジャーナリストの欧陽文風の自伝『現在是以後了嗎』(簡体字版はクアラルンプール、3nity、2006［論者未見]、繁体字版は台北、基本書房、2014) が詳しい。

[41] 許通元「假設這是馬華同志小説史」『有志一同：馬華同志小説選』(クアラルンプール、有人出版社)、246 頁。

[42] Lim Choon Bee、ペナン出身、2019 年現在はプトラマレーシア大学外国文学科副教授。作家でもある。

[43] 林春美「序：與島漂流」林春美、陳湘琳主編、前掲書、8 頁。

[44] 張斯翔『論馬華同志小説與同志文化』(台北市、國立台灣大學中國文學研究所碩士論文、2012)、2 頁。

[45] 楊邦尼「邊城三疊」『浮沉簡史―城市，晃蕩，與友愛』、6-13 頁。

[46] 本名林志遠、1976-、ジョホールバル出身、国立台湾大学卒。現在台湾在住。

[47] Tsai Ming-liang、1957-、サラワク州クチン市出身。

同性愛者として「半島」すなわちマレーシアで生活する潤いのなさと辛さも窺える[48]。台湾の「同志」ディスクールを借用してマレーシアの「同志」ディスクールに新しい風をもたらそうとする意図も読み取れる。

四、誰の「神話はもはや」：文学賞の中の虚構と真実

「神話はもはや」の論争に戻ろう。鍾怡雯が言う現象は、同じく馬華作家の黄錦樹[49]も指摘している。黄錦樹は「神話はもはや」の約半年後、「「文心」凋零？」という評論を発表した。この文章の冒頭で黄は散文作家呉柳蓓（1978-）を名指しで批判した。すでに四冊もの散文集を出版している彼女の作品は、「散文」とされながら、語り手は時にタクシーの運転手の娘となり、時にはインドネシアの「外籍新娘（国際花嫁）」の娘となっており、内容のほとんどはあきらかに虚構であるためである。黄はさらに「神話はもはや」事件についても言及し、他の例も挙げて、散文は小説ではないので、虚構は許されないと述べた。文章の最後では、もし散文を虚構できるものだと解釈したら、各文学賞は散文賞をやめて「エセ叙情散文（原文：山寨抒情散文）」を設ければいいのだと揶揄している[50]（ただ、その後若手小説家の林韋地に、匿名のエッセイ賞の選評で真実性を追求できるわけがないと批判された[51]）。つまり、著名な小説家兼評論家である黄錦樹は、散文の機能は小説の機能は異なると考えており、散文は必ず事実に即さねばならないとしているのである。

約 2 週後、詩人唐捐[52]は、このような問題は文学賞の匿名性がもたらす弊害にあるとしながらも、語り手は本当の自分ではなくても差し支えない、散文作者は「本当の自我を以ってその他の自我に入る（原文：以本我入他我）」のでも構わないと主張している。このような文脈から見れば、散文は必ず「真実」に即すべきなのか、事実であるべきかについては、立場は必ずしも一致していない[53]。

一方、鍾怡雯が語る「神話」がいかなるものなのかについても、考えなければならない。

---

[48] 楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』、144-146 頁に参照。『刪情詩』で見られる台湾の影響は、速水信介「詩評：楊邦尼《刪情詩：在我手中微軟勃起》」『季風帶』4 号（クアラルンプール、三三出版社）、69-71 頁では論じられている。

[49] Ng Kim Chew、1967-、ジョホール州出身、国立暨南大学中国文学系教授。

[50] 黄錦樹「「文心」凋零？―抒情散文的倫理界線」『中国時報』2013.5.20.、E4 版。

[51] 林韋地「回望神話（下）」『中國報』、2016 年 3 月 15 日。

[52] 本名劉正忠、1968-、当時は国立清華大学中国文学系教授、2019 年現在は国立台湾大学中国文学系教授。

[53] 唐捐「他辨體，我破體―跟散文的「文心凋零」之説唱個反調」『中国時報』2013.6.6.、E4 版。

鍾怡雯の夫陳大為[54]は、以下のように述べている。

> 1990 年代は台湾最後の「文学賞黄金期」であった。21 世紀に入り、国際化（翻訳著作）した読書市場や消費文化の読書趣味、氾濫する文学賞の生態（そして低下していく受賞作のレベル）などの影響により、文学賞はその重要性を損ねている。20 世紀末の、最後の黄金時期には、林幸謙と鍾怡雯は散文で、陳大為は新詩で、黄錦樹は小説で賞を得て、四人が同時に興起したのである。[55]

つまり、「神話はもはや」と嘆く鍾怡雯も、「エセ叙情散文」賞を設けようと揶揄する黄錦樹も、文学賞が「氾濫している」と評価する陳大為も、文学賞受賞で有名になった作家であるが、彼らはいずれも、現在文学賞のレベルが低下していると考えているのだ。陳大為の統計によると、1981 年から 2011 年間、マレーシア華人が「重要」な散文賞を計 43 回受賞している。そのうち 1991 年から 2001 年の間に鍾怡雯が 19 回、1997 年から 1999 年の間に陳大為が 5 回受賞しており[56]、夫婦合わせて 24 回という受賞回数は全体の半分を超えている[57]。また前述の三人は、その後かなり頻繁に文学賞の審査委員となっている。さらに言えば、鍾怡雯はマレーシア華人散文を研究しており、夫の陳大為もまた馬華文学史を書いている。夫婦は学術的な連携が強く、互いに互いの研究や論文を引用し合っている。つまり、少なくともマレーシア華人作家の神話は、その数人の受賞から始まり、またこの数人が文学賞の審査委員となることによって「文学賞」のテイストを確定し、さらにこの数人の研究を手法としてその「神話」が事実化されたものと言ってもよい。

しかし、鍾怡雯の散文に対する考えは、黄錦樹のように固定したものではないらしい。1997 年、鍾は散文「給時間的戰帖」によって「聯合報文学奬」の散文大賞を獲得した。これは彼女が初めてとった散文大賞であったが、その年のうちにさらに散文「垂釣睡眠」で「時報文學奬」の散文大賞を得た。このダブル受賞で彼女は文壇の注目の的となっている[58]。勿論この前にも鍾は他の散文賞の副賞などを受賞していたが、面白いのは「聯合報文学

---

[54] Chan Tah Wei、1969-、ペラ州イポ市出身、2019 年現在は国立台北大学中国文学系教授。
[55] 陳大為『最年輕的麒麟—馬華文學在台灣（1963-2012）』（台南市、国立台湾文学館、2012）、156 頁。
[56] 陳大為、前掲書、254-256 頁。
[57] 約 56%。計算は論者による。しかし注意すべきなのは、前述のように、陳は文学賞が「氾濫していく」と考えているので、このリストは「公信力と競争力を持つ賞」しか統計していない。よって陳大為本人の主観的な見方によって「実質の知名度と影響力を持たない」ものは削除されている。詳しい説明は、陳大為、前掲書 251-253 頁に参照。ちなみに楊邦尼「毒薬」の受賞はリストに入っている。
[58] 陳大為、前掲書、159 頁。

奬」の謝辞である。

> 大学時代にはいくつかの詩を作りました。修士論文は小説について書きましたが、私は終始散文の創作に力を入れています。散文を書くのは誠に楽しいことで、生活の重心でもあります。これは私が初めて聯合報文学奬に参加したものですが、虚構の散文で参加したのです。私は散文において直接的に真実の生命の経歴を漏らす手法を好みません（私の一部の旧作は確かにそういう風に誤解されがちですが）。偶に私は記憶の映像のかけらを何枚か混ぜ、彼らを自分で糸を吐かせ、繭を作らせ、その文字を拾って文章にします。散文はまさにこのように楽しいものなのです。[59]

つまり、鍾怡雯の文学者としての出世は、まさに「虚構の散文」によるものだったのだ。しかもかねてよりこのような手法をとっており、そのこと自体を誇りに思っていると言うのである。当時の審査委員はすでに「散文の名家」とされていた周芬伶、焦桐、簡媜、痖弦、楊牧の五人であり、五人の評判の基準から見ると、周芬伶、焦桐は「芸術手法」を重視し、簡媜、痖弦は「感動」や「共鳴」を強調し、楊牧は技巧が大事だが、やりすぎると失敗すると述べている[60]。審査の過程で、楊牧は終始鍾を評価していないが、他の四人はその芸術性や文字の流暢さを高く評価している[61]。この過程を調査して看取できるのは、これらの散文や詩の名家たちは、審査する際に文章の内容の真実性を疑っていないこと、芸術性や共鳴を大事にしていること、そして鍾が「虚構」であることを告白しても、受賞が取り消されたりはしていないことである。

「虚構」であることを告白しながらも「散文名家」であり続けている鍾の、前述の受賞作やそののちの作品は、やはり楊邦尼「毒薬」と同様、作家の出身地マレーシアについてはほとんど描かれていない。マレーシア華人としての実体験に基づいて散文を書くかどうかはともかくとして、台湾の文学賞に応募する際は「マレーシア華人」としてのアイデンティティは二の次で、「芸術性」を高めた方が「共鳴」が得られやすいと考えられる。

鍾が作中ではっきりと散文の真実性を強調し始めたのは、2007 年に出版された「自伝体散文集」の『野半島』においてである。「自伝体」という言葉を使ったのは、おそらく今ま

---

[59] 鍾怡雯「得奬感言 生活的重心」『聯合報』1997.4.25.、41 版。下線は論者による。
[60] 楊蔚齡（記録）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學奬散文決選紀要（上）」『聯合報』1997.4.25.、41 版。
[61] 楊蔚齡（記録）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學奬散文決選紀要（下）」『聯合報』1997.4.27.、41 版。

での散文と明確に区別しようとする意図があったからであろう。『野半島』に収録された作品の中で、鍾はようやくマレーシアの言葉や熱帯雨林の風景を書き入れるようになった。ここで鍾が「告白」したのは、彼女にトラウマをもたらした家族の悲惨な歴史である。つまり、散文の中で「虚構」の心境を書いてきた鍾は、文学賞を多数獲得して「散文名家」となった後、ようやく「実体験」に目を向けるようになったとも言えよう。この事実から見れば、マレーシア華人系文学と「同志」文学は、マイノリティ文学の共通性を共有していることもわかる。しかし、彼女もやはり、「散文」は虚構できるもの、という神話を作ってしまった張本人の一人なのではないか。

五、結びに：「神話」とは何か

1　「神話」における複雑なコンテクスト

なぜマレーシアの作家楊邦尼の「毒薬」は台湾で受賞した2年後に批判の的になったのか。このことを考えるためには、「同志文学」と「馬華文学」が、「文学賞」という賞金レースの場でいかに交差して、新たな問題を生じたかを検討しなければならない。本論文ではまず「毒薬」をめぐる論争を紹介した。次に「毒薬」のテキストを分析し、朱天文作品の引用や模倣があること、そしてマレーシア的な要素がほとんど書かれていないことを明らかにした。次にマレーシアにおける性的マイノリティが受けた法律的社会的圧迫と、彼らを描いた文学作品（特に散文作品）の欠如、ひいては性的マイノリティ文学に関する研究すらも制限される現状について確認した。また、楊邦尼を批判するマレーシア華人作家鍾怡雯および鍾に関連する人事は、台湾の文学のテイストやマレーシア文学の研究のあり方も独断的に規定しており、台湾の文壇に強く影響を与えていることを確認し、さらに「散文の名家」鍾怡雯もかつて「虚構」散文に拠って賞を得ていたことを指摘した。

2007年前後まで散文が「虚構」である可能性を否定しなかった鍾が、2010年以後「審査委員の同情心を利用する」ことで「嘘で大賞を取った」等と楊邦尼を批判したのである。なぜその言葉がそのまま自分に帰ってくることに意識が向けられていないのだろうか。鍾への個人批判（HIV／エイズに対する知識の不足、HIV感染者への無配慮など）はさておき、楊邦尼が同性愛者であることや、HIV 感染者であることが、仮に全部本当ではないとしても、このような批判が生じる原因自体を、台湾の「同志文学」と「馬華文学」の文脈から考えなければならないだろう。

2 「同志文学」の視点：「感動ポルノ」に成り下がるマイノリティ文学

「同志文学」は自分の性的マイノリティとしての当事者性を主張して、マジョリティに異議を申すという機能を有している。しかし、作者が当事者であるかどうかという問題は、やはり読者の好奇心を惹起するものである。それはまた、作者のアウティングの問題に関わってくる。実際、1976 年『孽子』の連載を始めた白先勇は、1988 年まではゲイであることを公にカミングアウトしていなかったし[62]、また『荒人手記』も主人公は男性であり、明らかに女性作家朱天文の実体験ではないと考えられる。これらの作品は、リアリティよりも、むしろ芸術面において評価されてきた。もしも「当事者性」のみを重視するならば、このような文学作品の価値は直ちに取り消さなければならないだろう。三木直大の言い方を借りるならば、小説作品が「同志小説」として読まれるのは、作品の存在だけではなく、書き手と読み手の「共犯関係」により始めて成立するものであるが、散文作品でもこのような共犯関係が必要とされているということになる。特に、小説であれ散文であれ、「同性愛者」、「エイズ患者」、「原住民族」、「国際結婚によって生まれた子ども」など、自分のアイデンティティを公にすることの難しいマイノリティの当事者こそ、このような「当事者性」が曖昧である「共犯関係」を利用してはじめて社会に声を届けられるのである。

鍾怡雯が楊邦尼を批判する原因は、彼が「虚構」の散文で「同情心」を騙しとっている嫌いがあると考えたからだ。ここで浮上した「同情心」という言葉は非常に示唆的である。つまり、2010 年の鍾にとって、文学賞という世界の中で、マイノリティ（「同志」や「原住民」など）を書くものは、読み手の同情心を誘うものだと考えられていることがわかる。マイノリティ文学は、マジョリティへ理解を要請するものではなく、文学賞の審査委員にその不幸を見せつけることで、その「同情心」を煽る（騙しとる）とされている。鍾が、「今では外見からそうとわからないくらい治るなんて可能だろうか？エイズなのに。」と発言したのは、もちろん HIV／エイズに対しての知識の欠如によるものだが、その背景となったのは、おそらく文学賞におけるマイノリティのディスコースが持つ危険性であろう。楊が「他人事を語るように感情がかけていること」、さらに「治る」こと（しかもウイルスと「手を執りて」）は、「感動」や「説得力」や「共鳴」が足りない、ということになるのだ。

不幸なことに、そもそも 1990 年代の台湾におけるマイノリティ文学の発展は、文学賞が大きな役割を担っていた。その後一種の競技と化した文学賞は、主流社会の評者に感動さ

[62] カミングアウトしたのは、『PLAYBOY 国際中文版』、1988 年 7 月号のインタビューである。

せるための「感動ポルノ」(マジョリティの人々に感動させ、まるでポルノを見たように興奮させるもの)に成り下がった可能性が高い。このような「健常者が「かわいそうな人たち」として同情することを好む姿勢」[63]は、マジョリティの同情心を満足させるため、マイノリティの当事者に「努力する」ことや「苦痛を感じる」ことの演出を強要しなければならない。このようにして、マイノリティ文学は異議申し立ての機能を喪失し、むしろマイノリティの当事者の不幸を利用して、マイノリティの当事者へのステレオタイプ、そして主流社会のイデオロギーをさらに強固させるものに成り下がった。

3 馬華文学の視点:台湾を忘れない作家と祖国を忘れた作家

馬華文学の文脈から見ると、マレーシアは開放的になりつつある台湾とは異なり、とりわけ2000年以後は、「同志」に関する言説や社会的雰囲気はより保守化しつつあるのが現状である。そのため楊邦尼は創作に際し、台湾の同志文学でエイズ患者に関わる作品『荒人手記』を引用したり模倣したりしたのである。それは単に表現の借用であるだけではなく、同性愛者に対して比較的自由な空気を台湾で感じたので、マレーシア帰国後も、台湾の文学から材料を借用していると考えられる。

一方、1990年代以後の文学賞を総嘗めしてきた鍾怡雯、黄錦樹らは文学賞の審査委員や研究者となって以後、自らが築いた「神話」が自分が認めていないマレーシア在住の人によって壊されようとしていることに憤慨を感じ、新聞紙で公開処刑のように当人プライバシーを公開(つまりアウティング)した。しかもマレーシア文壇で、彼らが批判されることはほとんどない[64]。鍾怡雯は、自分の祖国・マレーシアは性的マイノリティに保守的で、マレーシアでは性的マイノリティやHIV感染者の当事者が自らについて書くことが困難であること、楊が逮捕される可能性があることを知っていた上で「告発」したのだ。この事件から、作家兼研究者の「神話」派閥の恐ろしさと、その評価の硬直化の問題も顕在化した。

4 「同志文学」と「馬華文学」の交差点:「当事者性」と文学賞の功罪

「同志文学」は1990年代に文学賞の肯定により台湾現代文学史の表舞台に一気に飛び上がった。「馬華文学」もまた、1990 年代に台湾の文学賞の肯定により台湾現代文学におけ

---

[63] 岩下恭士「「感動ポルノ」は要らない」『毎日新聞』東京版、2016.9.17.
(http://mainichi.jp/articles/20160917/ddl/k13/070/006000c 、最終閲覧2019.12.4.)。
[64] 林韋地、前掲文。

る重要性が再確認されたとも言える。しかし、楊邦尼「毒薬」の一件でわかったのは、文学賞はこのような社会の中のマイナーな存在を可視化させる一方、カノンの確立やテイストの単一化、さらに作家や研究者の人間関係の固定により、そのステレオタイプをさらに強固してしまうことが可能であることだ。結局、「当事者性」を強調すれば強調するほど、「当事者」が客体となってしまい、その表現意志が逆に不在となってしまうのだ。「マレーシア在住の華人作家が描くゲイでHIV感染者の散文作品」を評価するのに、結局作家本人も、マレーシアにおける同性愛者やHIV感染者も、さらに台湾の同性愛者やHIV感染者も、必要ではない「当事者性」を追求することにより、人格にも人権にも損なったという矛盾した状況が発生するのである。

「同志文学」も他のマイノリティ文学も、書き手と聞き手双方の暗黙の了解、あるいは「共犯関係」を存在させなければならない。しかしもし当事者へのステレオタイプが固定化することで人権的、人格的損害が発生するようであれば、マイノリティ文学の言説の意義が失われてしまう。もともとマイノリティ文学は、ダイバーシティの表現が期待されるものだが、逆にダイバーシティを表現できなくなり、主流社会の価値観をさらに強化するものになってしまうのだ。おそらくこのような問題は、同志文学や馬華文学だけではなく、従来「文学賞」によって主流社会や文壇の評価を得てきた女性文学、原住民文学などのジャンルや、これから評価されると考えられる外国籍労働者の文学[65]等に起こりうるものである。このような問題も、今後の台湾のマイノリティ文学を読んでゆく際に重要になってくるであろう。

参考文献

日本語

赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東京、東方書店、2012）

赤松美和子「新移民の文学が描き始めた新たな台湾の民主化」『東亜』597号、2017.3

岩下恭士「「感動ポルノ」は要らない」『毎日新聞』東京版、2016.9.17.
（http://mainichi.jp/articles/20160917/ddl/k13/070/006000c 、最終閲覧2020.2.5.）

クウオン・キ・ジュン「マレーシアー同性婚に関する法的および政治的制約」『福岡大學法學論叢』61巻3号（福岡市、福岡大学研究推進部、2016.12.）

[65] 「新住民文学」の評価と文学賞について、赤松美和子「新移民の文学が描き始めた新たな台湾の民主化」『東亜』597号、2017.3、100-107頁に詳しい。

朱天文著、池上貞子訳『荒人手記』（東京、国書刊行会、2006）
鈴木賢「台湾における性的マイノリティ「制度化」の進展と展望」『比較法研究』78 号（比較法学会、2017.1.31.）
三木直大「阮慶岳短編小説の構造と「台湾同志文学史」の政治学」『アジア社会文化研究』16 号（東広島市、アジア社会文化研究会、2015）
三須祐介「前衛としての台湾文学―1990 年代文化論再考―国際シンポジウム参加記」『日本台湾学会ニュースレター』32 号（2017.3.）
劉靈均「性的マイノリティ運動　戒厳令解除以後の道のり」『台湾を知るための６０章』（東京、明石書店、2016）

中国語
「有關《荒人手記》的部分」朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997［1994］）
宇文正主編『九十九年散文選』（台北、九歌出版社、2011）
朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997［1994］）
林韋地「回望神話（下）」『中國報』、2016 年 3 月 15 日。
林春美、陳湘琳編『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』（セランゴール州、有人出版社、2013）
唐小宇「面對這樣的問題，當事人該如何回答？」http://kaorikuraki.blogspot.jp/2012/10/blog-post_25.html（2012.10.25、最終閲覧：2020.2.5.）
唐捐「他辨體，我破體―跟散文的「文心凋零」之説唱個反調」『中國時報』2013.6.6.、E4 版
陳大為『最年輕的麒麟―馬華文學在台灣（1963-2012）』（台南市、国立台湾文学館、2012)
速水信介「詩評：楊邦尼《刪情詩：在我手中微軟勃起》」『季風帶』4 号（クアラルンプール、三三出版社、2017.6. ）
速水信介「重服那方〈毒藥〉：七年之後再回首」『季風帶』6 号、2017.12.
許通元「假設這是馬華同志小説史」『有志一同：馬華同志小説選』（クアラルンプール、有人出版社）
張斯翔『論馬華同志小説與同志文化』（台北市、國立台灣大學中國文學研究所碩士論文、2012）
國立台灣大學男同性戀研究社編『同性戀邦聯』（台北、號角、1994）
湯炳超『論馬來西亞華人男同志的處境』（桃園市中壢区、元智大学中国語文学系碩士論文、2015）

楊邦尼「毒藥」『中國時報』(2010.10.6.)
楊邦尼「鍾怡雯的〈神話不再〉」『聯合報』2012.10.14.、D3 版
楊邦尼『古來河那邊』(セランゴール州、大将出版社、2013)
楊邦尼「想我大學的同志社團 Gay Chat」『號外』437 号(2013.12.)
楊邦尼『浮沉簡史—城市，晃蕩，與友愛』(セランゴール州、大将出版社、2015)
楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』(クアラルンプール、三三出版社、2017)
楊蔚齡(記録)「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要(上)」『聯合報』1997.4.25.、41 版
楊蔚齡(記録)「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要(下)」『聯合報』1997.4.27.、41 版
翟翱「愛滋的可能」『聯合報』、2012.10.12.、D3 版
歐陽文風『現在是以後了嗎』(台北、基本書房、2014［2006］)
鍾怡雯「得獎感言 生活的重心」『聯合報』1997.4.25.、41 版
鍾怡雯『野半島』(台北、聯合文学、2007)
鍾怡雯「神話不再」『聯合報』2012.10.7.、D3 版
鍾怡雯「誠信」『聯合報』2012.10.17.、D3 版
羅一鈞「《時報文學獎散文首獎》毒藥【楊邦尼】」ブログ「心之谷」
http://heartvalley.blogspot.jp/2010/10/blog-post_15.html (2010.10.15.、最終閲覧：2020.2.5.)
羅毓嘉「文學不該「社會盲」 談散文創作的紀實與虛構」『人籟論辨月刊』98 期(台北、中華利氏學社、2012.11.)
羅毓嘉「允許魍魎現身」『棄子圍城』(台北、宝瓶文化、2013)

(三重大学人文学部)